

第23回小野十三郎賞記念対談

生の感触を失わないために—— 蜂木  
あやこ詩集『名づけ得ぬ馬』を巡つて

蜂木あやこ (詩部門特別奨励賞)

三井喬子 (詩部門最終選考委員)

●名づけ得ぬ：

三井 私は蜂木さんのことを存じ上げておりませんでした。この『名づけ得ぬ馬』一冊だけの情報しかありませんので、何かトンチンカンなことを申し上げたら訂正していただけますか。

蜂木 何か必要があれば情報を追加いたします。

三井 何も知らない専業主婦の婆さんですので(笑)、よろしくお引き回しください。

蜂木 こちらこそ、私も対談といううのは初めての経験なので、わくわくしております。

三井 今日はおめでとうございます。

蜂木 お目に留めていただいてありがとうございます。

三井 この本を拝見したとき、「名づけ得ぬ馬」という名前にはまずびっくりして引くようになります。

三井 この本を拝見したとき、「名づけ得ぬ馬」という名前にはまずびっくりして引くようになりますが、そこであえて「名づけ得ぬ」ということを言つて、たしかにいろんな反応が聞こえます。私はいま八十歳です。詩問題だと思います。

を始めた三十代ぐらいの頃——もつと若い二十歳ぐらいの頃にもやっていたんですが、子育てで十年ほど抜けていますので——、それで三十いくつかで始めた頃はこの「名づけぬ」というのが流行つていて。

蜂木 そうだったんですか。

三井 サミュエル・ベケット (『名づけぬもの』) だつたかな。

蜂木 そういう本があるらしいことは聞きましたが、読んだことはなくして。

三井 私はこれを最初、演劇で見たんですね、昔。「労演」で。お芝居を各地順番で呼んでやっていたんです。そのときに「ゴドーを待ちながら」(サミュエル・ベケット)なんかをやつていて、そこで知ったんだと思います。

その頃のことはきっと蜂木さんはご存知ないかと思いますが……。

蜂木 まったく勉強不足で、存じませんでし

たが、勝手な私の詩の想像のなかから出てきた言葉でして。一番最後に収められている

「おとずれ」という作品のなかにそのタイト

ルの言葉が出てくるんですねけれど。「詩」が名づけること——ということがよく言われていますが、そこであえて「名づけ得ぬ」という

ことを言つて、たしかにいろんな反応が聞こえます。私はまだけれども、未知の詩の訪れを

「名づけ得ぬ馬」というふうに名づけたといふ、『名づけ得ぬ馬』まるごとが未知の詩の訪れの暗喩といいますか、比喩になつてゐるんです。

●詩が身体に侵入してくる

三井 この場合にはぴったりの言葉だと思うんですけど、私は自分の経験が先に体に染みこんでいるものですから、あれつと思つたんですね。読み出してみたらすごく面白くて、詩が身体に入つてくるという感じがしました。

蜂木 身体に。

三井 言葉だけで形成された詩ではなくて、そこに蜂木さんの身体とか、感情とか、知識とか、そういうものが全部伝わつてくるような。身体として迫つてくるような感じを受けました。

蜂木 ありがとうございます。私も、魂の叫びというような言い方もしますし、そういう語というような言い方もしますし、そういう

何か、血の通つたものを書きたい、という思

いは持ち続けていて。ただ一方で言葉を洗練させていきたい——完成するということはな

かなかなくて、一生かかるともそこまでは誰も行かないんですけど、そういう完成の方

向を目指していきたいということ、やっぱ

り有限な自分の心身、肉体をもつて、その血の流れ、躍動みたいなものを失いたくない、という気持ちも強いですね。

三井 女性詩にはそういう感覚を持っているものがあると思うんですけど、私には、すべてが知的、論理的な詩よりも馴染みやすかつた。

颯木 詩集の編集に入りました、最初は抒情たっぷりに歌い上げる詩集にしたいというか、そうなりそうだという予感があつたんですねども、編集者と相談しているうちに、エピグラフとか——冒頭にサンテグジュペリの言葉を引いたり、目次の後にちょっとアフォリズム的なものを入れてみたりと、作っているうちに形が少し変わってきたとして、抒情、肉体の言葉というだけではなく、冷静などころ、抑えるようなところも入る形になつたんですね。それをどのように受け止められるか、読者の方に届くのかというところは、出してみるまでわからないと思って作つたんですけど。

三井 いわゆる抒情詩というわけでもないし、私は、最近はない詩集だな、と思つた。やっぱり抒情がないと詩としては成り立たないというような偏見を私は持つていて。

颯木 私も——現代詩にはいろいろな詩を書かれる方がいて、積極的、果敢に実験的な試

みをされている方もいらっしゃいますし、いろいろな方がいて詩の世界が出来ているんですけども、自分は抒情だな、というのを思つています。大正とか昭和の時代に書くのとは、今はまたいろんな刺激が入ってきますの

で、多少変わる部分もあつての、今回の一冊なんですね。

三井 読んでいて、作つていく、組み立てていく、構成するというのか、そういう意思を感じたんですね。

颯木 俳句とか短歌——私は短歌もちょっと書くことがあるんですけど、詩は建築に似ている、というイメージがありますね。構造があるというのか。

三井 誰かに勧められて読んだ本、忘れてしまつたけど、そういうことを書いてある本を読んだことがあります。とても理解するとまではいかなかつたけど、なんとなくわかる。

颯木 私もそんなに詩論をたくさん読んだわけではないんですけど——詩論より詩が先行するとも思いますし、詩を書いているところでも自分の意図ではなくて、詩の言葉に導かれて未知の時空に引き入れられるような体験が、本当に夢中になつてしまふ魅力の一つだが、

三井 いうのを書くのかな、と思いつつ、すごい教えに背くような言葉かもな、と思いました。

はなぜ青い?」だつたかな、ああいつた言葉がずきんときますね。

颯木 ありがとうございます。

### ●宗教と冒瀧

三井 いろいろ教えていただきたいところがあるんです。私、キリスト教の素養がないんですね。これを読んだとき、旧約聖書を読まなくちゃと思つたんだけど。

颯木 たしかにキリスト教の影響は受けてい

るんですけど、素朴な信仰者にはなりきれないくて、それで詩を書いているようなところがあるので、眞面目な信仰者から見たら冒瀧的と思われるんじゃないかつていうぐらいに思ひますけど。

三井 「真鑑の椅子」って、これは死刑の電気椅子とかイメージされました?

颯木 書評を書いてくださつた方がそのようにご指摘くださつたんですけど、私はそういう発想ではなく、勝手に自分のイメージーションのなかで膨らませた、椅子ですね。「雷」と合わせて電気椅子のイメージになつてゐると思うんですけれど。

三井 これで、あれ、キリスト教の信者がこいつのを書くのかな、と思いつつ、すごい教えに背くような言葉かもな、と思いました。

颯木　ずいぶん背いていると思います（苦笑）。冒流的なことを詩のなかで書いていて。ただこの詩集の序を書いてくださった若松英輔さんは、祈りというような視点から書いてくださいましたが、読まれる方によつていろいろ印象が違うようで、暴力性とか激しいものを受け取る方もいらしたんですね。

三井　サタンが出てきません？ 「観覧車とDavidともう一人」のところで。このもう一人は誰でしょう。

颯木　このダビデは旧約聖書とは関係なく付いた名前なんんですけど——三人、「私」とデイヴィッドと、あともう一人いるという。最後に「私」がデイヴィッドと、もう一人の人と、二人に恋をしてしまうというような、そういう想定で書いたんですけれど。

三井　デイヴィッドともう一人と、両者が重なつて、両方の面を持つている——あるときは観覧車が下がつたり上がつたりするような、そういうイメージで、あるときはデイヴィッドに惹かれるし、時間が経つと他の人に気持ちが移っていくような、そうして神性と悪魔性がせめぎ合うようなところがあるんじやないかと思つて。言葉上ではわからないんですね。

颯木　ありがとうございます。自分でも気に

入つてゐる作品で。

三井　「北の海から生まれた岬の人」というのは。

颯木　それがもう一人の人です。

三井　それをサタンかな、と思つたんです。

颯木　特にどちらかが聖でどちらかが俗といふ区別をしたわけではないんですけど、両性具有的な存在がデイヴィッドなので、いろいろ今話題に上がるジエンダーの問題を背景に感じつつ、出てきた作品のように思つております。

三井　「北の海から生まれた岬の人」というが不思議で、良いなあ、と思うんですけど、それがどういうものを実際に示しているのかは私はわからなかつたです。

颯木　そこは自由なイメージで受け止めてい

ただいて構わないというか、たとえばサタンとか誰かを指示したわけではないので。作品の世界観のなかの一要素としての人物といいますか、そんな感じで——説明になつてないかもしれませんけれども。

三井　わざとデイヴィッドとサタンを書き分けたのであれば、私はちょっと読みが駄目だな、と思つたんですけれど、そういうわけで、これ、好きですね。

颯木　デイヴィッドという人物と、もう一人

と、「私」という、二者の関係ではなく三者の関係になつてゐる、というところを書きたかったですね。

三井　それから「デイープ」も好きでした。

「卵の中心がことごとくメッキだ」なんて、えつ！ と思つて。これなんかどこかで解説

しろと言われたら、できないと思つた。これは颯木さん本人がパツと感じしたことなんですか。

颯木　そうですね、ほんと筆の運びの勢いで、感情をこう、吐き出したという勢いで書いた詩行なんですけれど。

三井　これも人の意表をつく面白い言葉だと。颯木　ありがとうございます、面白いところにご注目ください。

### ●なるべく一行目から面白く書きたい

三井　私は詩を読むときには自分の体との関係で読むようなところがありますので——要するに直観ですね。理屈が通らないときがあるんですよ。だから選考委員なんてお役目は私にとっては重荷なんですが——それだけまた勉強しなきやいけないな、と思うんですが。颯木さんの詩の最後の一行、締めの一行為第一連目とか、こういうところにすごく惹かれて。

**楓木** 私も三十代ながぐらいから、いわゆる詩を書く方たちの輪のなかで書くようになつたんですけど、なんか周りの方が博識で気が引けてしまつて、難しい本がなかなか読めなくて、体調のことなどもあって、読書が思うように進まない、ある意味コンプレックスのなかで詩を書いてきたんですね。書くより読むほうが労力だと思うことつてございませんか？

**三井** 私も自分で書くほうが楽です。

**楓木** 読むの、大変ですね。読むのが大変だから、なるべく一行目から面白く書きたい——読者の身になつてみると、つらつらずつと読んでいかないといけないのは大変なことなので、なるべく一行目から掴んでいきたいつていう、コンプレックスから出た思いがありますね。

**三井** お気持ちがよくわかりますし、すごく効果的に使っているなと思います。

**楓木** 散文詩も二篇ほど初めて詩集に収めてみたんですけど、字数が多いので、退屈なものは書かないようすく氣をつけて書きたいな、というところがありまして。詩を書くのはとにかく一番目としては、自分が楽しめから、夢中になるから書いているんですけど、同時に作品を発表する、世に送り出す

となると、一種それは贈与の行為になるというか、他者とか世界に対しても――歴代いろんな、詩人に限らず音楽家も画家も、作品を、すごくいいものが出来たから残したいというところがあると思うんですね。プレゼントだとつたらなるべく最高のものを差し上げたいという、それと自分が楽しみたいところ、その一致点で作品をつくつていきたくな、というのありますね。

**三井** 贈与ということはわかります。私も工

ッセイのなかでそのことを書いたことがあります。ということは楓木さんは、この『名づけ得ぬ馬』もそうですが、すごく勉強なさつてるんですね。それで、贈与というのもご本でお読みになつたんじゃないでしょうか。

**楓木** 本当に、勉強はしてないんです。謙遜

ではなくて。書くなかで思い当つた、そういうようなことなんですか。よく詩の教室とか、そういうところに行くと、指導者の方つてたいてい、書けるようになるにはまず読みなさいとおっしゃいますね。一面そのとおりだと思いますし、基礎にはなると思うんですけど、ただ受験勉強と違つて、地道

し、無垢なことと知識教養を重ねていって到達できるところ、どちらも大事にできたらな、というのが理想ですね。

●腎臓の陰で…

**三井** 「ユダと逢う」っていうのも好きなんですが、わからないところがあつた。「赤ん坊が四方から匍匐前進してくる」のに逢うというのは、イメージの元がありますか？

**楓木** 赤ん坊というと一般的には無垢で可愛らしいものですが、そこに逆に一種恐ろしいようなイメージを持たせた一行です。自分より弱い、幼いと思つていたものが、すぐ力を持つて迫つてくるような、そんなイメージです。

**三井** もう亡くなつて二十年近い友達がクリスチヤンだったんですけど、赤ん坊が匍匐前進して向かってくるということを——彼女の詩集のなかには入つていなんんですけど、そういう風景を書いているんです。

**楓木** じゃあ実際にそういう情景が、私のこれは想像上のことだつたんですけど、

**三井** 「腎臓の陰でユダと逢う」というのは、ここだけズバッとこう書いてるので、ユダは腎臓とか排泄とか、そういうことに関係があるのか、私はわかりませんでした。

楓木 そうですね、心臓だつたりするとイメージが魂とかそういうことに近すぎちゃうと思つて、腎臓は毒を濾過する器官なので、それで腎臓にしたんですけど。

三井 ああそういう意味ですか。これは効いっているわ。

楓木 ありがとうございます。「ユダと逢う」は、——作品の最後にも書き添えたんですけど——私はときどき朗読ライブをやつているんです。楽器の人とダンスの人と一緒に。ギターの担当だった方が、「チュニジアの夜」という、ジャズの名曲らしいんですけど、それを弾いているのを聴いてインスピレーションが湧いて、書き下ろした作品なんです。だからその曲のイメージを、言葉を色彩にしてスケッチしたような感じで書いたので、あまり意味とか論理とかは通つていなうと思うんです。曲のイメージの色彩というよう受け止めていただいたら嬉しいという作品です。

### ● 言葉の勢いを信じて いく

三井 だいたい惹かれる詩は、祈りとか、宗教的なものに偏つていくんです。それをギュッと引き締めて書いたらこういうふうになるのかな、と思つたんです。

楓木 どちらかというと、宗教に従順に従う

よりは抗う、葛藤するような作品のほうが力が入るんです。詩人の困つたところなのかも知れませんけれど。

三井 こうである、と上から押しつけられるといや違う、こうのことだつてある、と言ひ返したくなる。

楓木 そうなんですよね。私は子供の頃からわりと大人しいタイプで、学校の先生の言うことをよく聞く優等生タイプだつたんですけど、そのうえで高校生の頃にきっかけがあつて求道して、十七歳の頃に洗礼を受けていたんです。ただその後に、やっぱりその世界に收まりきらないものを自分のなかにすごく感じて、詩で爆発するようになつたという感じなんですね。ただ影響は受けてると思います。この詩集にも結構、モチーフとしてユダとか出てきますし、一つ言葉へのスタンスというのか、キリスト教は言葉の宗教とも言われて、言葉は信じる対象なんですね。詩の世界に何もわからず飛び込んだときに、たいていの詩人の方が、言葉はまず疑うべきだとおつしやる方が多くて、私が初めての詩集を出したときに、ご感想で「言葉を信じすぎている」とご指摘してくださつた方がいて、心底びっくりしてしまつたんですね。

私としては言葉を疑うという発想がなかつた、言葉はいつも信じる対象だつたということがあつて、別に詩を書いていて何か正しい答えが一つ決まつてゐるわけでもありませんし、ただ自由に詩の言葉の海を遊んでいるだけなんですが、ただ——さきほど申し上げた、読書が思うように進まないというコンプレックスと合わせて、詩の次元に飛び込んでいくというか、信頼して言葉に導かれていくような、まあ疑つていてもいいんですけど、疑いながらも言葉の勢いを感じていく、そういうスタンスはキリスト教から引き継いでいる、振り返ると思いますね。

三井 私もそういう態度でした。先に言つた一緒に長くやつてきた友達の影響もあるし、今となつては、この詩集、「名づけ得ぬ馬」を彼女に読ませたかつたという気がすごくするんですよ。「私は牧師さんを信じてない」とかなんとか言いながら、ちゃんと教会に通つっていたんですね。

楓木 たしかにそこはいわゆるアンビバレントな状態になるんですよ。やっぱりキリスト教つて十字架の受難の物語とか、非常にドラマチックで、心を揺むストーリーを持つた宗教なので、そこはなかなか、一度揺まれると離がたいというところはあるんですね。とはいえば宗教つて人の手になるところが多分

があるので、民を治めるためという都合で教理が加えられたり削られたりっていうプロセスもあつたんだろうと思いますし、そうする所やつぱり取りこぼされている人間のいろんな面がたくさんあつて、そこで苦しくなってしまふと思うんです。

三井 私自身は八百万の神、そのへんの草木

にも神様が宿っているというような、いい加減な人間ですから（笑）。

颶木 けしていい加減とは思わないです。私はもともと家がクリスチヤンホームだったと

いうわけではないので、家には神棚とか仏壇とかあつたんですね。途中から求道して、その後逡巡して、自分はやつぱり詩のほうが魂がのびのびすると思って今に至つてるので、草木に宿るという感覚もわかります。

### ●混沌と豊饒

三井 この「太陽葬」なんかはバタイユかなと思いましたけれど。

颶木 これもなんか、妄想ですよね。太陽のなかに犬と盗賊の死体がいっぱい入つていて。三井 すごいですよ、こんなのが最初の一行に持つてくる。で、辛い真夏がやってくる。悪臭がもれて……。私、こういうところに弱いんですよ。

颶木 それは嬉しいです。この詩集の最初の

一行に百合が出てきて、百合つて清らかなイメージもあるんですけど、何かこう、生とか世界つてもどもとは混沌というか、非常に豊饒でゴチャゴチャしたところだと思うんですね。だから清らかなものに一本化できるものでもないし、そこにいろんな豊かさを、

この詩集のなかで展開したいと思つて。ときどきギョットとするようなものも出てくるんですけれど、そこを喜んでいただけると大変嬉しく思います。

三井 どうも清らかなものが出てくると、壊してみたい気がするんです。

颶木 私もその気持ちです。「太陽葬」の次の「天の魚」で、最後に「祈りと歌は絶望のようによ巡るだろう」と書いたんですけど、これもそういうた反抗心というか私独自の感じ方から出ていて。祈りというか希望とか平安に繋がる、それが一般的なイメージなんですが、私は自分の実感として、八方塞がれけれど、私は自分の実感として、八方塞がりだつたり願いが叶わないときに祈るって、安らかな気持ちにならないんですよね。非常に悶えるような祈りって希望というより絶望に近いんじゃないかな、と思って書いたので、これは結構思い切つて書いたんですけど、教会では怒られるでしょうね（笑）。

三井 （笑）これいいなあ、と。その次の「ボジションX」なんかでは、「影法師を五つも

率いている」とあります。が、この五つという特定の数は。

颶木 自分のなかで多い、たくさん怒りの分裂があるというのは、まあ五ぐらいが自分の感覚だつたんでしようねえ。

三井 私の知識のなさがこういうところで出ているんだろうかと思つた（笑）。

颶木 いやいやいや、出典も何もないんです。

三井 私はあまり出典があると困る。（笑）颶木 ほとんど私の自由なイメージと妄想で出来ている詩集ですので、楽しんでいただければ――。

三井 良かったです。順番に見てきましたけど、「フェルマータ」の後に「おとずれ」ですね。希望とかいうよりは、辛い、苦しさが出てきましたよね。「わたし全体を駆け抜けで、これがやつぱりいいですね。

颶木 ありがとうございます。これは読んでくださつた方がいろいろに解釈してくださつたんですけど、それはきっと読みによって開かれていて、きっと詩にそういう意味も生まれていくんでしようけれど、私が最初に書いたときは、「名づけ得ぬ馬」がやつてきて、最後に「名づけ衝動」が起つた瞬間を書い

たんですね。未知の何かが来たときに、わあつと、今、言葉を発する、その瞬間を切り取った詩行なんです。

三井

私はもう読みながら、すごく自分の好みに引きつけて読んでいるな、と思つて申し訳ないなんだけれど。

颯木 それは逆に嬉しいです。

### ●身体性

三井 読んでいてとても楽しい詩集でした。やっぱり詩集、詩にはこうやって、自分が打たれて、それで心地よかつたりするような面も必要ですよね。発散できるんですよ。読者の、苦しみを持つていてる人の、こうちょっと傷つけるとわあつと出ちやうような、そういう力があると思うんですね。それは身体性という言葉で言えるんじやないかという気がするんですけど。

颯木 そうですね、身体性というと、痛みとか傷とかいうものが私の詩集によく出てくるんですけれど。感覚ですよね、体で受け止めれる傷の痛みとか、そういう。創作ってキズを作るつて書きますよね。生の感触みたいなものを失わないために、痛みも喜びも両方引き受けしていくような、それこそが生きていくことの豊かななんじやないかな、と、今、

回の詩集を作っていくプロセスで、詩に教えてもらつたような気がします。

三井 すごく同感します。

颯木 前の詩集まではわりと、——さつきキリスト教的な祈り、それから悪魔的なものと

いうお話を出たんですけど、わりと両極端な価値のなかで引き裂かれて葛藤して書くということが多かった。今回の詩集を作つては、兩方も受け止めたらいいんじや

くなかで、兩方も受け止めたらいいんじやないか、というようなところに、階段で言つたら踊り場みたいなところに、出られたような気がしています。創作は、自分も傷を負いながら書くもの——身を削つて書くなんてよ

くいいますけれど、そんなに大げさなことでなくとも、何か命を作品に移し替えていくよう、そういう営みのようにも思います。結構まわりを犠牲に——家族に迷惑をかけつつ書いてきたという疾しさもあるんですけど

——何も傷つけずに書けたら一番いいのかもしれませんけど、犠牲を伴わない創作という

のはないんじやないかと。業のようなもの——そこはキリスト教的に罪というよりも、業

という言葉が私はピッタリくるんですけど、——詩に限らず生きていくことはみんなそうなのかもしれません。

三井 他の犠牲なくして生きてはいけない

んですよね。

颯木 食べること一つとっても。

### ●夜空

三井 もう一つ思ったのは、夜空に対して偏愛があると思いましたね。星空に対しても。

颯木 「砂金」とかですかね。

三井 そうですね。大犬座ですかね、「銀」、これは。

颯木 天驅ける大犬。

三井 こういうことを言うと、私というか、私たちはちょっと古風であると言われること

があると思いますけど、この「最果ての天秤に置き去りにした」、これは天秤座ではないんですか。

颯木 これは星座という想定ではなかつたんですけど、天秤座つてありますね。

三井 何かこういうものを見て、すごく夜空を見ながら詩を書く方なのかな、と。

颯木 書いてるとき、——まあ窓があるので木が見えて、青空がちょっと見えますけど、目が悪いので星つてなかなか見えないですね(笑)。想像上の星空の星空ですね。この前、

三日月の横にきれいに金星が出ていたのは見えましたけど。

三井 見ました。うちは南のほうにしか窓が開いてないので、南しか見えないんだけど。

颯木 南に見えた気がします。きれいでしたよね。

三井 本当に晴れた、きれいな空の後に見たから、感激してたんですね。

颯木 星だつたり花だつたりっていうのは、すごく進んでる詩人の方々には見捨てられてるようなモチーフのよくな気もしますけどね。

三井 そうですね。あまりに象徴的すぎるとか。

颯木 私はわりとそういう、——下手するとありきたりなものに陥つてしまうので気をかけないといけないのはたしかなんですけど、古来詩のなかで愛されてきたモチーフをやっぱり愛しちゃうんですよ。

三井 そうですよね。

颯木 それを自分なりにもう一回書いてみたい、という気持ちがあったのと、あまり知識を詰め込んでいなかつたので怖いもの知らずだつたゆえに、そういう古いと言われるようなモチーフも怖がらずに書いてこられたというところはありますね。

三井 それがすごい魅力になつてると思うんですね。「名づけ得ぬ」が古いイメージがあ

るというのと、だけど今のもつと若い人たちのものに対しても、えつ、と思う気持ちはないわけでしょう。私たち世代までなんですね、思っているは。そういうことを思うと、言葉を新しいとか古いとか言うんじやなくて、やっぱり使ってやらなきや可哀想じやないかと思う。

颯木 そうですね、新しい言葉というのがあるのかよくわからないですけれど……新しく出た電化製品とか、品種改良した花とかですかね。やつぱり昔からあるものは今もあるわけですし、時代——一人残らず皆が時代の申し子で、時代の影響は生きている限り受けるわけですね。ただ私がよく思うのは、自他ともに認めるところで、ちょっと時代を間違えて生まれてきたかなというところがあつて(笑)、もうちょっと昔だったら良かつたのかなとも思いますけどね。新しいものがわりと苦手なんです。ただ知らず知らずのうちに影響を受けている部分については、自然と作品のなかに、自分でも気づかず反映されるでしょうし、それで充分なんじやないかと思つたりしています。

三井 あまり新しくて、誰にもわかつてもらえないっていうのもちょっと問題ですね。とつかかりぐらいは教えてよ、と。

颯木 私の詩もわかりにくくとおっしゃる方

がいらっしゃるんですけど、私も他の方の詩がわからないことが多いですし、どこか波長が合つたところで読者と詩人が出会うと幸せだと思いますね。

三井 颯木さんと私ですね。

颯木 ありがとうございます。

### ● こぼれるもの、古さとエネルギー

三井 なかなかわからないものが多いですよね。これが若い女の人の感覚がよく現れているとか、よくそういう評が詩集評なんか読んでると出てきますけど、私若くないのでわからぬと思って(笑)。

颯木 そうですね、誰がそれをわかるのかという問題はありますよね。本人以外に。この詩集を作るなかで、もちろん担当の編集者の方のアドバイスもたくさん、有意義なものをいただいて出来上がつたんですけど、何年かやつている朗読ライブの仲間からの刺激というのも多くてですね。さつきの「ユダと逢う」はギター担当のメンバーの演奏を聴いてインスピレーションが湧いて書いたものですし、ピアノ担当のメンバーが詩に合わせて作曲をしてくださつたりもするんですけど、これから何年か前に言われた言葉で手元にメモがあるんですが、「詩を書くときに削られたり

失われたものたちの再来、再会、声が呼び寄せたものとの出会いです。それを音に託しておつむりなんです。」というふうにメールでくださつて。とても心に残つていなんですけれど、言われた当時はそれがどういうことがあまり理解できなかつたんですね。何年か経つて、じわじわとそのメッセージが実感として感じられるようになりました。

詩というは、この世とかこの社会に横行している言葉によつて、失われたり切り捨てられたりしてしまつたものを、もう一度言葉によつて取り戻そつていう、無謀な試みなんだと思います。そして詩を書いても書いても、その都度さらに取りこぼすものがある。

三井 無謀でもやらなきやならない、やりたい、そういう言葉ですね。

颯木 それはもちろん私の発見というよりも、多くの方がすでにおつしやつてることなのかも知れないですけれど、だからこそ詩は優しくて、でも同時に激しいものでもなくちやいけない、という気がしてて。何かこう、マイノリティみたいなことともリンクする気がします。

三井 そうですね、私もよく、あちらでヨシヨシしておいて、それをそんなカラスを殺しちやつたりとかやります。両方含まれてない

と、ちょっと人間が書いたものじゃなくなつて、いると思うんですね。それって結構怖いことだと思うんですけど。

三井 私の子供の頃は、田舎でしたから、鶏の首を縮めてつていうことは祖母がやつていましたからね。羽をむしって。それを美味しく美味しいって言つて食べていた。

颯木 優しさと激しさ、もつと言つたら残酷な部分も人間つて持つてますし、清廉潔白で詩を書けるものでもないです、やっぱり自分の業だつたり、そういうたところにもがきながら紡いでいくもの、という気がしますね。それから、よく私が疑問に思つて、三井さんにお伺いしてみたかつたんですけど、詩人は孤独だつてよく言いますけど、そういう思いますか？

三井 自分の考え方、どういうふうにしていくかつていうのは孤独な自分なんでしょうけど、大勢のなかで生きていかないと成り立たないですね。両天秤のなかでやつてているようなことができなくなる。私はそれを、意識しているというよりは、孫を可愛がるついでにカラスを殺すような、両方をやらないと安定を保てない。天秤が傾いちやうんですね。

颯木 生き物を殺すということだと、きっと文明化される前は、飼つてある家畜を自分の手で殺して食べたりしていたわけですよね。そういうたプロセスが全部、今は畜産業者がやって、スーパーでパックされて売られていました。そうすると殺すときに人間が発していった一種のエネルギーっていうのは、行き場が失

つてていると思うんですね。それって結構怖いことだと思うんですけど。

三井 私の子供の頃は、田舎でしたから、鶏の首を縮めてつていうことは祖母がやつていましたからね。羽をむしって。それを美味しく美味しいって言つて食べていた。

颯木 そのプロセスは全部隠されてしまつて、いるけれど、結局は同じことをしているわけですよ。今のほうがもっと残酷かもしれないですね。狭い鳥小屋にたくさん閉じ込めたりして。

三井 その頃は九州からでしたけど、夜行列車で冷凍して、首のない足のない鶏を都会へ送つてあるんだつて。今通つてある夜行列車には死体がいっぱい乗つてゐるんだ、つていうイメージを持ちましたね。

颯木 何か詩になりそうですね。

三井 風木さんの、ある種の古さですか、そこにはそういうふうに、もろに事柄、事態を引き受けようとしている態度があるからかもしれませんね。百合のために棺を作るみたいになつていくつていうのは。

颯木 どういうところで古さに繋がるんですか。

三井 私たちの古い経験ですね。それときれいにパックされたものとの、その間にあるも

のを颶木さんは全部持つてらっしゃるんじやないか。

颶木 実生活ではそれは、パックされた肉を買っているわけですが（笑）、そこで本来放出されたエネルギーを持て余して詩を書いているようなところはありますね。

三井 そういうものを含めて詩を書きたいと思いますし、この詩集には入っているな、という気がします。

### ● 幻の一篇

颶木 あとは一つエピソードとして、ゲラの段階で頁数の関係で一篇落とさなきやいけなくなつたんですね。幻の一篇がありまして、

それは私にとつては大袈裟じやなく自分の命を救つてくれた一篇だつたんですね。そのなかの詩行を繋いでいくことで危機を乗り切つた時期がありまして。それを収めることができなかつたのは残念だつたんですけど、たまたま詩集を編むというのはそういうことなのかな、と。命を救つてくれた一篇さえ落とすことも辞さず、進まなきやいけないときは進まなきやいけないというか。その一篇も別な

機會に発表する機会があるかわからなくて、もしかしたら土に還つちやうかもしけれないけれど、私を支えてくれた一篇に違ひないし、

その一篇のことが忘れられない。

三井 次の詩集でその一篇を膨らませて、また一冊の詩集にすることもできますしね。どうしてもね、自分がやつてきたことって、何もかも入れたいわけですよ。

颶木 そうですねえ、何を入れて何を落とすか、書くときは思いつくままにいろんなものを書いているんですけど、纏めるときは――

一回は『名づけ得ぬ馬』ということで、馬の出てくる詩をときどき置いたんですけど、そういう工夫とともに必要かと思うし。どうなんでしょうね、書いたものを全部入れて編む方もいらっしゃるとは思うんですけど。

三井 落とすと可哀想。

颶木 そうですね。何かこう、子供みたいな感じですよね。

三井 でもやっぱり思いきらなきやならないときははあると。

颶木 そうですね。

三井 詩集一冊出しておつかれだと思いますけれど、入れられなかつた詩のことを思うと、やつぱり生かしてやりたい、って思われません?

颶木 そうですね、ただ今回の詩集のテーマに沿つた詩だったので、次回編むときはやっぱりお蔵入りかもしれませんね。

三井 でも持つたときには、スッと馴染む厚さで

もあるし、――あまり大きすぎるとしんどいし。小さい詩集がいいとは言うけれど、やっぱりちょっともう少ししっかりした厚さ、本らしい本がほしい、そういうときもありますね。丁度適度などろだつたと思います。

颶木 いろんな制約もありましたし、原稿の段階ではわりとイメージが混み合つていて、が多いように自分で感じて、重すぎるんじゃないかと思って、編集者の方と相談して、余白をもうちょっと取ろうかとか。全部で二十八篇かな、今までの詩集は毎回そのぐらいですね。もつと入れたいところでもあつたんですけど、自分で読み返しても、あまり多くても心に収まりきらないですね。

三井 そういうときに、編集者の目つていう

のはすごく、いいな、というか、立派だな、と思ったんです。

颶木 そうですね、本当に。

三井 後になつてみると、私が無理やり入れたものは無駄だつたな、と思ったことが何度かあります。大事な詩だと思ったものも、後から見ると流れに入つていかないのかもしれませんよ。

颶木 そうかもしれません。その一篇を落として、それからまた順番を変えたんです。一篇抜けたことで整わなくなつてしまつたので。

三篇目に「砂金」が来てるんですけど、これが最初の段階ではもうちょっと後ろだつたんです。でも順番を変えたことで結果的に「砂金」をより生かす構成になつたんです。わりと繊細なタイプの作品なので、あまり他の作品のイメージの後だと押し潰されちゃうんですね。

三井 そういうことはありますね。「永遠はなぜ青い?」は素朴で魅了されてしましました。

颯木 ありがとうございます。これは私としては結構迷つたんですね、最後に入れるか、もつとあつさり終わらせるか。

三井 この言葉が力を持つてゐるんだと思いますけど。

颯木 じゃあ良かつたです。編集者の方も、これがあつたほうがいいという意見でした。

三井 最初と最後がピント張り詰めてらつしやる。

颯木 一行目と最終行ですか?

三井 一目と最終連といつてもいいけど、最初と最後が、ズバッと。たとえば「観覧車とDavidともう一人」だつたら、この後に何か付けようとは思われないでしよう。

颯木 何か小説の場合だつたら続編を書くこともありますけど、詩はやっぱり完結するものなんでしょうか。

三井 連作でなさつてることも皆さんありますね。少しずつそのなかで、繋がるところと繋がらないところがあつて…。

颯木 私はわりと飽きっぽいので、一つ書いたら次は別のを書きくなつちやいますね。これは勝手なことは言つても繋がつてきているものもあるので、急に全然違うものが書けるわけでもないんですけど。飽きっぽくて良い面もあるかな、と。より面白いものを書かないと自分が退屈しちゃうぞ、というのはモチベーションになるかもしねれない。

三井 長いこと経つてから見ると、案外一つのことしか書いていなかつたりして。

颯木 それはあるかもしません。何かこう、詩つて論文とか小説と違つて、たとえばこのテーマについて書こうと思つて書き始めるものじやないというか、何か刺激があつたときに最初の一行為浮かんで、書いていくうちに出来ていく、不意に何かイメージが湧いたり、今まで気づかなかつた自分の深いところの何かに行き当つたりしながら、立ち現れてくるようなものですよね。

三井 それは颯木さんと私のやる方向であつて、そうじやなく最初から結末がわかつていでしようね。

●着地 a

颯木 私は書いてみないと、最終連がどうなるかいつもわからないですね。これは勝手な持論なんですけど、目的地がわかっているんだつたら論理で書けばいいと思うんですね。そういうものを拾い集めるのが私にとつては詩なので。でも最初に詩を書き始めた頃は、自分の感情を表現したいという意図が先立つていたと思うんですね。何を書くのも自由なので、思いを綴るということがスタートだと思うんですけど、だんだん、言いたいことを言つたと思うんですけど、だんだん、言いたいことを言つたと思うのが詩ではない、というか、でも究極的に言いたいことを言うのが詩だというか——上手く言えないんですけど、魂レベルで言いたいことを言うのが詩なんじやないか。表層の部分の言いたいことというのは、社会のなかで影響を受けている部分、世の都合とか、そういうなかでこういう意見を言うべきだろうとか、そういうところの次元の言いたいことじやなくて、本当に自分が言いたいことつていうのは自分でも気づいていないことが多いです。

三井 それが書いていると出てくるということがあります。

いろんな書き方がある。

**颯木** そうですね、詩を書いていると、そういうのがフツと出てくる。

**三井** いろいろ考えるんですけど、結局私のやっていることは単に言葉を転がしているだけかな、と思うんですけどね。

**颯木** 言葉が転がるんだつたらすごく良いなと思いますけどね。

**三井** 近年転がさないと転がらないようになってきて（笑）。もう詩を書くのもやめなきやいかなかな、と思つたりもします。

**颯木** 一つ詩集が出来たり、詩が一つ書けたり、それこそ初心者の頃は講座とかに行ったりしてアドバイスを頂いて、最終連の着地が課題だね、なんて言われたりして、それを一旦克服というか、上手く書けるようになつたところで、あまり纏まつてしまつても言葉が生きないということもありますし。

**三井** そうですね、開いてないと次に繋がらないです。いかにして開いた状態で終わらせるか、というのも。

**颯木** それは結構難しいですね。

**三井** 閉じてしまつてはちょっと。だから「永遠はなぜ青い？」っていう、ああいう開き方がすごく私にとつては魅力的なんですね。

**颯木** 疑問形で終わっているところですね。一枚の紙に詩を書くこと自体、ある意味世界

を制約しているわけですよね。それはまたあえて何か取りこぼしてしまうことでもあるし、ただそこで何を言葉として残すか。最初のお話に戻りますけれども、たとえばキリスト教

という従うべき枠があるとすると、それに抗う気持ちが起きたり、制約が逆にエネルギーを噴き出させる基礎になることはあるのだと

思います。どういう長さの詩を書くかも、短歌や俳句と違つて自由ですけれど、――すごく長いものを書かれる方もいらっしゃるみたいでけれど、一息で終わる、その詩のサイズというのも、読んだり書いたりする者的心の器と共に鳴するのかな、なんて思いますね。

### ●着地 b

**三井** それが同人誌という枠のなかで書くと、だいたい何行つていい…。

**颯木** 投稿規定が決まつてているわけですね。

**三井** あれが私はちょっと邪魔くさくて。

**颯木** たしかに。

**三井** それで長いこと個人誌をやつていたんですけどね。だんだん皆さんの、同人の、詩の形や書く内容が決まつてしまつるので。

**颯木** それは制約があまり良くない方向に働いている例なのかもしれないですね。参加者の公平性の面からいくと規定つて便宜上必要

だと思つんですけど、どうしてもこう、一行入りきらない作品は諦めなきやならないとか、ありますよね。

**三井** 朗読なんかでも、三分、四分というよう

にキチンとなつてしまつと、ちょっと苦し

いですよね。そういうときは音楽のほうを優先されるんですか？

**颯木** 詩のライブなので、基本は詩が優先ですね。曲のほうを調整していただく感じです。

ただ詩を読み終わつて最終行、その後にまだ音楽が続いていてもいいわけですね。あと

は先に曲が終わつて、その後に言葉が続いてもいい。

**三井** 私は朗読するときに音楽とやるというのは、その点が辛くて。

**颯木** わりとアバウトにやつてしまつてるんですけど。ただ、音楽が先に終わるにしろ、余韻のところで音楽が残るにしろ、聴いていてスッと馴染めればいいかな、というぐらいのところをやつています。

**三井** 一度拝聴したいものです。

**颯木** ありがとうございます。今、コロナ禍でなかなか開催できなくて。「名づけ得ぬ馬」の記念のライブもやりたいとは思つて心に温めております。

二〇二一年一一月、オンラインにて実施。